

オビニオン

先崎千尋の

物とされて 素朴なものから、電気
器。その倭文 スタンドの笠、バック、
織の作品 ぞうりなどの小物類、
が、先月末 掛け軸や額に入れたも
から今月初 のなどバリユエーショ
ンが豊富だった。

読者のみなさんは 「倭文織」を「存じだろ
うか。倭文織と書いて 「しじおり」と読ませ
る。単に倭文と書いて しじり、しじり、しじ
と読ませることの方が 倭文機グループ「てし
多い。倭文織は、藤布、 こと」のメンバー一
葛布、科布、からむし 人。十二年のキャリア
織などと同じく、山野 がある。展
に自生する植物を素材 示された作
とした原始布の一つな 品の多くは
だ。文献に残って 櫛(こ)う
いても、現物が存在し ぞいの表皮を裂いて糸
ていないので、幻の織 を織り、織ったもの。
帯状にそのまま織った 綾を織る機を知るひと
あらざりき。時にこの

古代織「倭文織(しじおり)」が復活

村に初めて織りき。因 な人たちが結成され、
りて名づけた」とある。 米沢市や徳島県木頭村
また、同町にある常陸 などで研修を積み、今
二宮神社には織物の 回の作品展を開くまで
神様と言われている建 になった。
葉植命(たけはつちの 実には、倭文、静とい
みこと)が祀られてお う名称は瓜連町の独壇
り、織物関係者の信仰 場ではない。全国に倭
が篤い。 文神社はかなり広く分
 布しており、関東・東
 海と山陰・畿内に多い。
 鳥取県東郷町の倭文神
 社は伯耆一宮である。
 倭文という地名も多く
 見られる。静岡という
 地名もしずはたに由来
 する、と言われている。
 第一に、神祭りの幣
 として重要なものだっ
 た。現在でも、神事に
 は麻が用いられている
 ように、清らかなもの、
 魔除けとなるものであ
 る。奈良時代には倭文
 幣が用いられていた。
 第二に、倭文織は色
 彩美しく、貴人たちの
 装飾になるものだった。
 赤駒に倭文布で飾った
 鞍を置き、たまき(腕
 輪)を倭文で飾ること
 はきらびやかなことで
 あった。
 倭文織の終わりはい
 つだろうか。文献上は
 十世紀前期が最後であ
 る。平将門の乱の頃に
 は消滅してしまった、
 と考えられる。その後
 常陸国では倭文織の技
 術で編製の「綾」を織
 り、その技術が袖に継
 承された、と伝えられ
 ている。
 今でこそわが国では
 着るものに不自由はし
 ない。しかし、綿が伝
 来し、木綿が庶民のも
 のになったのは徳川中
 期以降のことだ。それ
 までは麻などの自然織
 維を使い、一生の内に
 たった三着しか着るこ
 とが出来なかった、と
 も聞いている。庶民に
 とっては網など夢のま
 た夢でしかない。
 古代布が静かなプ
 ムだそうだが、はるか
 昔を今によみがえらせ
 るグループ「てしじお
 り」の活躍に注目したい。



茨城大学地域総合研究所
客員研究員

先崎 千尋さん

【略歴】一九四二年瓜
連町生まれ。慶應義塾大
卒。水戸市農協(現水戸農
協)、瓜連町農協(現ひたち
なか農協)、瓜連町長など
を経て現在ひたちなか農
協代表理事専務、茨城大
学地域総合研究所客員研
究員。著書に「農協のあ
り方を考える」(日本経済
評論社)など。

【略歴】一九四二年瓜
連町生まれ。慶應義塾大
卒。水戸市農協(現水戸農
協)、瓜連町農協(現ひたち
なか農協)、瓜連町長など
を経て現在ひたちなか農
協代表理事専務、茨城大
学地域総合研究所客員研
究員。著書に「農協のあ
り方を考える」(日本経済
評論社)など。